

Weekly report



株式会社 ミンカブソリューションサービス
東京都港区東新橋1-9-1

為替週間展望＝ドル円は高値圏でのみ合いが継続か

〔10月9日からの1週間の展望〕

週間高低（カッコ内は日）			10月2日～10月6日		
	始 値	高 値	安 値	終 値	前週比
ドル・円	149.50	150.16(3)	147.43(3)	148.97	-0.40
ユーロ・ドル	1.0569	1.0592(2)	1.0448(3)	1.0533	-0.0040
=====					
国内株・金利／米国株・金利					
	終 値		前週末比		
日経平均株価	30,994.67	-862.95	日本10年債利回り	0.804	+0.039
ダウ平均株価	33,119.57	-387.93	米10年債利回り	4.719	+0.147
=====					

<来週の主要経済統計等>

- 9日 独8月鉱工業生産指数
国際通貨基金（IMF）・世界銀行の年次総会（15日まで）
- 10日 日本8月経常収支、日本8月貿易収支
IMFの世界経済見通し（WEO）
- 11日 独9月消費者物価指数確報値
米9月生産者物価指数
米連邦公開市場委員会（FOMC）議事要旨（9月19、20日開催分）
- 12日 日本8月機械受注
英8月鉱工業生産指数、英8月製造業生産指数、英8月貿易収支
米9月消費者物価指数、米新規失業保険申請件数
独8月経常収支
- 13日 中国9月消費者物価指数、中国9月生産者物価指数、中国9月貿易収支
スイス9月生産者輸入価格
ユーロ圏8月鉱工業生産指数
米9月輸入価格指数
米10月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値

【前回のレビュー】堅調なドルの動きに加えて、円は日銀による大規模緩和策の維持を受けて、ドル円は堅調な推移が継続するとみられる。150円に接近したことで、日本の金融当局によるドル売り円買い介入が警戒されるものの、ドル円は引き続き緩やかな上昇基調が続くとした。

【ドル円は高値圏で上昇一服】

ドルは緩やかに上昇基調を続けて、3日に150・16近辺まで上値を伸ばした。150円に乗せた後は147円台半ばまで急落、その後は149円台に戻すなど、荒れた動きを見せた。4日以降はやや上値の重い展開が続いている。

9月19～20日の米連邦公開市場委員会（FOMC）を受けて、金融引き締めが長期化するとの観測が広がり、その後は3日まで米長期金利が上昇するとともにドル買いの動きが続いた。

3日に8月の米雇用動態調査（JOLTS）が市場予想を大きく上回り、ドル買いに傾いてドル円は150円台に乗せた。ただ、その直後に大きく値を崩して147円台半ばまで急落した。その後は149円台まで戻した。急落の背景は日本の金融当局によるドル売り円買い介入との観測が出ているものの、確認はできていない。介入かどうかの確証が得られないものの、介入警戒感がくすぶり続けている。

4日には9月の米ADP雇用統計が市場予想を大きく下回り、米債利回りも低下したことからドル買いの動きも一服した。その後のドル円は148～149円台で一進一退の動きとなった。

米連邦準備制度理事会（FRB）のバー副議長は2日に「金利は景気に対して抑制的な水準に達しているか、かなり近付いている可能性が高い」と述べた。また「当分の間、金利を高い水準に維持する必要がある」との見解を示した。FRBのボウマン理事は「インフレ率を2%に戻すには、さらなる金融引き締めが必要となる」と述べている。

5日にサンフランシスコ連銀のデイリー総裁は「最近の米国債利回りの上昇は、利上げ1回分に相当する」「そうした意味では一段の引き締めの必要はない」との見解を示した。これらのFRB高官の発言からすると、金融引き締めはあってもあと1回程度で、引き締めた高水準の金利は当面維持される可能性が高いということになる。

10月9日の週は11日の米9月生産者物価指数、12日の米9月消費者物価指数が注目される。12日の米消費者物価指数は事前予想が前年比+3.6%で前回の+3.7%から鈍化見通し、コア前年比は+4.1%となっており、前回の+4.3%から伸びが鈍化する見通しとなっている。

米消費者物価指数が予想を下回るようなら、金融引き締め長期化への警戒感が後退して、ドルの上値を押さえそうだ。ただ、FRBが目標とする2%に達しているわけではないので、極端なドル安に傾くことはないだろう。予想を上回るようならインフレ警戒感が再燃してドル買いに傾くこととなろう。

ドル円は150円接近では介入警戒感が強まるものの、147円台半ばから148円付近では底堅い動きが見込まれる。こうした中、ドル円は高値圏でのみみ合いが継続するとみられる。ドル円の目先の予想レンジは、147.00～151.00円。

日米の経済指標やイベントとしては、10日に日本8月経常収支、日本8月貿易収支、11日に米9月生産者物価指数、米連邦公開市場委員会（FOMC）議事要旨（9月19～20日分）、12日に日本8月機械受注、米9月消費者物価指数、米新規失業保険申請件数、13日に米9月輸入価格指数、米10月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値などがある。

【ユーロドルは一時戻しても再び下落基調で推移か】

ユーロドルは米長期金利の上昇やドル買いの動きから下値を模索する動きが続いていた。3日には1.04台半ばまで下落する動きを見せた。4～5日に上昇を見せたものの、戻りの動きは限定的となっている。

4日発表の9月のユーロ圏サービス業PMIは48.7となり、市場予想の48.4を上回った。8月のユーロ圏生産者物価指数は前年比-11.5%となり、市場予想と一致した。前回の-7.6%からは大きく低下した。8月のユーロ圏小売売上高は前年比-2.1%と市場予想の-0.9%を下回った。

ユーロ圏でのインフレ率は落ち着きつつあるものの、景気の弱さがユーロの重石となっている。こうした中、ユーロドルは一時的に戻しても21日移動平均線を回復することとはできず、再び下落基調で推移するとみられる。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0300～1.0750ドル。

英国の経済指標は低迷しているものも多い。2日の9月の英製造業PMIは44.3となり、予想や前回の44.2をわずかに上回った。好不況の景気判断の分かれ目である50からは程遠い状況となっている。4日の9月の英サービス業PMIは49.3と、前回や予想の47.2を上回った。こちらは50回復が視野に入り、明るい内容となる。ただ、5日の英9月建設業PMIは45.0と予想の50.1や前回の50.8を大きく下回った。

ポンドドルはドルの堅調さを背景にユーロドルと同様に上値の重い展開が続いてきた。4日には1.2037近辺まで下落を見せた。8月の英消費者物価指数は前年比+6.7%、コア前年比は+6.2%となり、落ち着きを見せつつある。ただ、依然として高水準を維持している。英経済指標は鈍化傾向を見せているものも多い。こうした中、積極的にポンドを買い進む材料にも乏しいとみられ、戻したところでは売りに押されて軟調な流れが継続することとなりそうだ。ポンドドルの目先の予想レンジは、1.1900～1.2300ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、9日に独8月鉱工業生産指数、11日に独9月消費者物価指数確報値、12日に英8月鉱工業生産指数、英8月製造業生産指数、英8月貿易収支、独8月経常収支、13日に中国9月消費者物価指数、中国9月生産者物価指数、中国9月貿易収支、スイス9月生産者輸入価格、ユーロ圏8月鉱工業生産指数などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。